魔王のお嫁サマ！？

熊野クマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王のお嫁サマ！？

【Ｎコード】
Ｎ８２２３Ｗ

【作者名】
熊野クマ

【あらすじ】
私の名前は土屋流亜、１８歳。
普通の両親から生まれ、普通の家庭で育った、いたって普通の女の子だ。
そんな私は今日、３年の学生生活を終え、高校を卒業した。
４月から県内の大学にも通うことが決まっている。
きっと楽しいキャンパスライフ、そして新しい出会い、素敵な彼氏が待っていることだろう。……彼氏はできるかどうかわかんないけど…。

しかしそんな私の想いも人生も、このあと完膚なまでに叩きのめされ、粉々に打ち砕かれることになるとは、その時はまったく知らなかった。
いや、想像なんてできなかった。
まさか自分の人生も世界も１８０度かわることになるなんて――――
※当小説は所々挿絵が入ります。読者様の想像を損なう恐れもございますので、そういったのがお好きではない方は挿絵表示をオフにすることをお勧め致します。
今後は挿絵が入る項には前書きに「※挿絵あり」とだけ表示させて頂きます。

1．序章（前書き）

初めて小説を書かせて頂いたので拙い部分も多々あると思いますが、これからどうぞよろしくお願いします。更新はまったりしていこうと思っています。

1. 序章

私の名前は土屋流亜（つちやるあ）、１８歳。
普通の両親から生まれ、普通の家庭で育った、いたって普通の女の子だ。
そんな私は今日、３年の学生生活を終え、高校を卒業した。
４月から県内の大学にも通うことが決まっている。
きっと楽しいキャンパスライフ、そして新しい出会い、素敵な彼氏が待っていることだろう。
……彼氏はできるかどうかわかんないけど…。
しかしそんな私の想いも人生も、このあと完膚なまでに叩きのめされ、粉々に打ち砕かれることになるとは、
その時はまったく知らなかった。いや、想像なんてできなかった。
まさか自分の人生も世界も１８０度かわることになるなんて――――

「おかえり、流亜。素敵な卒業式だったわね」

みんなとひとしきり挨拶を終え、家に帰ると一足先に帰っていた母が出迎えてくれた。

「ただいま。素敵っていっても普通の卒業式だとおもうけど」

そういって苦笑する。こっちとしては校長先生や来賓の方々の長い話を聞くのは結構退屈だったりする。
でも親としては自分の子が無事卒業したことに感慨深いものを感じ

るのだろう。

「お母さんにとっては素敵なのっ。あんなに小さかった流亜がこんなに大きくなって…

しかも立派に卒業までして……うっ」

そう言って卒業式を思いだしたのかエプロンの裾をもって出てきた涙を拭いている。うちの母は涙もろい。

「ハハ…素敵ならよかったよ…あ、そう言えばお父さんは？」

父も今日は仕事をお休みして、母と一緒に卒業式に来てくれていた。そしてどこの家族よりも早く卒業式の会場にきて買ったばかりのビデオカメラを意気揚々とまわしていた。

…恥ずかしかった。

「パパはリビングでさっきとった映像を観てるわよ」

「えっ、もう！！？」

「ふふ、流亜がちゃんと可愛く映ってるか気になったみたい。帰ってからすぐ確認してたわよ。流亜も荷物置いたら観てみたら？可愛く映ってるか気になるでしょ」

微笑みながら母はそういうと、リビングにいる父の方にむかって歩いていった。自分も観るのだろう。

「別にどう映ってようが気にならないけど…」

はぁ、と若干ズレた母親の言葉にため息をつきながらも、ビデオを

観るために荷物を置きに自分の部屋へと階段を上がっていった。

2．かけ違えたボタン ―１―

「う…うぅ…うううう…うっううっうっ」

―――前言修正。母も涙もろいが父はそれ以上に涙もろい。
荷物を置いてリビングへ向かうと私の卒業式の映像を観て、父が目から滝のような涙を流している。プラス鼻水もたれてものすごい顔になっている…。
母がそれを見てさっとティッシュを渡す。さすが長年連れ添った夫婦だ。すばやい。
よくみるとすでに空になった箱が隅に転がっていた。

「あ、ありがとう、ママ……ずびぃいいいい、ずるるるるぅ」

母からもらったティッシュで父は盛大に鼻をかんでごみ箱に捨てる。が、すでにティッシュの山となっているごみ箱には入りきらず、そのままぽてんと床に落ちる。

「もぉおお、恥ずかしいなー、ちょっと落ち着いて……」

リビングの入口でその光景を見ていた私はさすがに恥ずかしくなって、父を落ちつけようと声をかけようとした。すると、ちょうど私が卒業式の答辞を読む場面になり、それを観た父がさらにヒートアップする。

「お、おぉぉぉぉ！あんなに小さかった流亜がこんなに大きくなって…しかもこんなに立派に答辞まで読んで……う、、、うおぉぉぉぉ！！パパは…パパは……」

そういって、さっき鼻をかんだのもむなしく、また新しい鼻水と涙でぐっしゃになりながらテレビの私に頬ずりする。

ぞわわわわわわ

一気に悪寒が駆けあがる。実際、私にやられるよりは百倍マシだが、さすがの父の姿に軽く引く。

「ほらほら、パパ落ち着いて。流亜が帰ってきてるわよ。テレビより本人にしてあげたほうが流亜も喜ぶわよ。ねえ、流亜？」

母がそういって暴走する父をなだめながら私の方を振り返った。

いやいやいや、喜びませんからっ！！むしろ引いてましたから！！！急に斜め上からのまったく見当違いな母の言葉に驚きながらも必死で横に首を振って答える。

「流亜…？」

父の顔がテレビからゆっくりと私の方へ振りかえる。その刹那…

「るぅううあああああ！！！」

「いぃやあああああああ！！！」

バキィッッッ

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら突進してくる父に恐怖を感じた私は咄嗟に右手を突き出し、私の拳が父の顔面にめりこんだ。

「……まったく、流亜ってば本当お転婆さんなんだから。いくらうれしいからって
顔はダメよ〜。パパはお顔が取り柄なんだから」

見当はずれなことをいいつつも、軽くひどいことを言ってのける母はニコニコしながら
そういって父の顔を手当てする。

「ママ…それってどういう……」

対する父も母の微妙な言い回しに引っ掛かりを覚えつつもおとなしく手当てされている。

「ぜんっぜん嬉しくないからっ！むしろ怖かったんだから！！
もうっ、お父さんも落ち着いてよねっ」

頬をふくらましながら腰に手を当てて父を軽く睨みつける。

「か…可愛い……」

そんな私をみて父は目をキラキラさせている。
ダメだ。全然わかってない。こめかみがひきつるのを押さえつつ、
できるだけ冷静に言った。

「たしかに高校は卒業したけど、来月から大学いくんだから。そん
なに感動しなくっても…家から通うことになるんだし…」

そう言ってため息をつくと両親はなぜかポカーンとした顔になって
二人は顔を見合わせる。

「「えっ？」」

「えっ？」

どうしてそんな顔になるのか、驚きと焦りにも似たような表情の両
親の顔をみて私は得も知れぬ不安に駆られる。
不意に母が口を開く。その顔はまだ驚きに固定されている。

「流亜…大学にいくの？」

母の出した言葉は全く予期せぬものだった――――。

3．かけ違えたボタン－２－

「え…いくの？っていくよ。だって試験も受けたし、合格もしたし…どうしてそんなこと聞くの？」

私は母の言っている意味がよくわからなかった。だって大学を受けたいっていったときは二つ返事でオッケーしてくれたのに。

「どうしてって…だってパパ……ねぇ」

「うむぅ……ママ、もしかしたら私たちは勘違いしてたのかもしれないな」

勘違い？何を勘違いすることがあるのだろうか。二人は何かを考えるように「う～ん」と唸っている。それを見て私はどんどん不安になっていく。

「勘違いってどういうこと？私、大学いっちゃいけなかったの？」

あまりの不安に最後は声が小さくなっていき若干涙ぐむ。両親が勘違いしていたのは確かなようだが、もしかしたら私も何か勘違いしていたのかもしれない。

でも大学合格したときは二人して喜んでいたのに…考えれば考えるほど分からなくなる。

私が不安で目を潤ませていると父はあわてて私の元に駆け寄り、床に膝をついて私の手を握りしめた。

「すまない流亜、違うんだ。いや、厳密には違わなくはないんだが…」

父の話す言葉の矛盾に頭の中でクエスチョンがつく。

「違わなくはない……？それって大学…いっちゃいけないってこと？」

か細い声で父がいった言葉を反芻し、そこから先ほどの質問に対する答えを見つける。

「流亜、いっちゃいけないんじゃなくて、いけないのよ」

「え？いけない…」

母の答えに愕然とする。いっちゃいけないんじゃなくて「いけない」。

それはどういう意味なんだろうか。うちは裕福とまではいかないけどそれなりに普通の家庭だと思っていたけど、実は家計が厳しくって私の大学に行くお金が足りないのだろうか…？

「お金が足りないなら私バイトするよ！奨学金制度とかもあるし…。でも生活が厳しかったなら言　ってくれれば私、就職したのに……」

色々、疑問が残るところもあるが、自分もできる範囲で家族の負担を軽減したい。大学もしたいことがあって行くわけではなく、高卒で就職できるところが少なかった為、大学でスキルを磨こうと思っていたのだ。

「いや、流亜、そういうことじゃない。大学にしろ就職にしろどっちもできないんだ。

私たちは、ずっと前からそれを知っていたし、お前にも小さいころ話したことがあるから大丈夫だと思っていたんだが…」

大学も就職もできない？それじゃ私は何をすればいいのだろうか。さらに疑問がわく。父が言葉を続けようと口を開くのを見て、とりあえず最後まで聞こうと耳を傾ける。すると母が両手をポンっと叩いてニッコリとこう言った。

「あっ、でも就職といえば就職よねっ！！永久就職の方だけどっ！！！」

……

……

……はいいいいいいいい！？

びっくりすることが聞こえた。

『永久就職』

私が知っている意味と母が言っている言葉の意味が一緒なら、それはすなわち

『結婚』

ということだ。

だれが、だれとっ！！！？？？

「ど、どういう事？永久就職ってアレだよね、世間一般でいうケッコンってことだよね！？」

母の突然の物言いに口をぱくぱくさせながらも尋ねる。

「ええ、そうよ」

微笑みながらキッパリとハッキリと肯定した。

一瞬視界が真っ暗になる。しかし、その返事に今までの疑問が一気に溢れ出る。

「誰が、誰と！？っていうか、お父さんが言ったずっと前から知っていたって…

どうして教えてくれなかったの？それに大学いけないならなんで受けてもいいって

言ったの！？」

たくさんの疑問に脳が処理に追いつかず、混乱しながら半泣き状態で二人に叫んだ。

「あー、大学の事は悪かった。それについてはパパもママも誤解していてな。

その、受けたいだけかと思ったんだ。試験を」

「行きたいとは別だと思っていたのよねぇ」

父は困ったように頭をかき、母は悪いとも思ってないような口ぶりで朗らかに言う。
行きたいから受けるのであって、行けないのに試験だけ受けたい人はいるのだろうか。
明らかに普通はしない間違いを二人はしていた。前から両親はどこかズレていると思っていたが、今回のことで分かった。どこかじゃない。全部がズレている。

「それじゃお父さんが言っていたずっと知ってたことと、結婚ってどういうこと？
詳しく教えてくれない？」

もう二人が勘違いしないようにキッチリ細部まで聞こう。もしかしたらこれも勘違いかもしれない。

「うむ、それは流亜が生まれた時から流亜が高校を卒業したら結婚するという事を知っていた。それは決められたことでもあったし、パパとママにとっても自然なことだったから、流亜が知らなかったのを知らなかったんだ」

「生まれた時から決められていたこと……？」

「そう約束したのよ。あなたの結婚する人と」

「私が結婚…する人？」

「ああ、そうだ」
「ええ、そうよ」

二人は同時に答え、頷いた。そして、私の結婚相手だという人の名前を言った。

「名はヴィスラヌ様という」

「魔界を統べる、一番偉い方。魔王様よ」

それは私にとって、とても信じられる話しではなかった。

4．結婚相手は魔王様！？

名前からいって日本人じゃない。それどころか職業は魔王ときたもんだ。
ありえない。そんな妄想癖のある人と結婚なんてしたくない。
むしろうちの両親もそんな得体の知らない人と約束なんて交していただきたくない。

「魔界とか魔王とかそれってゲームとか漫画とかの世界でしょ？
そんな会ったこともない危ない人と結婚なんてしたくないし…それに私が生まれてくる前に約束したって…私、了承した覚えないんだけど」

さらっと魔界とか魔王とか言っちゃってるうちの両親も相当危ない気もするけど、
それは黙って胸のうちに秘めておく。

「うーん、そう言われても決まった事だし、私たちにはどうする事もできないのよねぇ。それに、流亜も小さい頃に魔王様にお会いしてるわよ？」

「えっ！？ウソッ！！」

「本当よ。って言ってもあれは、まだ2歳とか3歳の頃だったかしらねぇ」

「ああ、多分そのくらいじゃないか？あの頃からすでに魔王様は流亜にメロメロだったなぁ。まぁ、流亜の愛らしさといったら…みんなを虜にするからなあ～」

「ふふっ、流亜ってば魔性の女ね。魔王様の妻になるに相応しいわっ」

と、冗談が本気かもつかないような二人の会話を聞きながら、私は胸に刻んだ。

『魔王様はロリコン』

だ、と。

「というか…もしかして、その頃の私にこの人と結婚するとか云々とか言ったの？」

肩を落としてため息をつきながら尋ねる。いや、尋ねるまでもない。絶対そうだという確信があった。心なしか目も据わってくる。

「おお！そうだ、そうそう！！よくわかったな。思い出したか？」

ガクッ

やっぱし…。そんな事だろうと思った。想像通りの答えに体から力が抜けていく。

「覚えてるわけないでしょ。２歳の頃とか記憶ないし…物心もついてないときじゃない」

はぁぁぁ、と深いため息をつく。

ダメだ。うちの両親と話していても埒があかない。

それにさっき母は「自分たちではどうする事もできない」と言った。それなら自分がその人に直接話すしかない。それにしても…

「ねえ、私が2歳になった時に会ったって、今その人は何歳なの？」

一瞬父と同じくらいの歳の人だったらどうしようと思った。でもまだ結婚するって決まったわけじゃないし、…両親の中では決まってるみたいだけど。

案外、落ち着きある大人な人の方が、話し合いがしやすいかもしれない。そう思っていると父が首をひねりながら答えた。

「詳しい歳はよくわからんが、見た感じ２５，６だな」

「まあ、会って話してみたら解るわよ。相手を知らないで行った方が色々聞けていいじゃない」

ねっ、と言いながら母がウィンクする。色々聞けてって…そんな仲良くなるつもりもないんだけど…。

とりあえず今日はもう夜になるし、明日の朝その人の所に向かってみよう。

でも年齢的にも社会人だし、急に行っても仕事で会えないかもしれない。まさか本当に職業：魔王ってことはないだろうし。

相手の都合もあるし、連絡先を聞いてから電話して確認とってみよう。

幼くて覚えてないとはいえ、会って約束した手前、電話で一方的に断る真似はしたくなかった。

「私、明日その人の所にいってちゃんと話し合ってくるね。時間の

都合がつくか聞きたいからその人の連絡先教えてくれる？
えーっと、そのヴィスラヌさん？って人の――――」

私がそういうと、日が傾いて暗くなり始めた部屋が急に明るくなり、
フローリングの床が白く発光した。

「えっえっ？何！？」

私は急に明るく光りだした部屋に戸惑いながらあたりを見渡す。
すると頭の中に聞き覚えのあるような無いような、なんだか懐かし
いような声が響きわたる。

――――ようやく我が名を呼んでくれたな。ルア…ずっと待っていた。

5．魔界の世界へこんにちは（前書き）

※挿絵あり

5．魔界の世界へこんにちは

――光に飲み込まれるっ……

足元には私を中心に2重の円が展開されており、その中には均等な間隔でいくつもの幾何学模様が浮かびあがっている。
円全体が一層強く発光すると、私の体は光に包みこまれ、ふっと軽くなり重力に逆らって浮かび上がる。

「お、お父さん！お母さん！！た、、助けっ…」

パニックで泣きそうになりながらも部屋にいる父と母に助けを求めると、母は自分の娘がそんな状況にも関わらず、落ち着いた顔をしてにこやかに手を振っている。
父にいたっては……泣いている……。

「う、うぅ…。流亜がもうお嫁にいってしまうなんて…パパは悲しいぞ。でも絶対幸せになるんだぞーー！！」

先ほどと同じように顔をぐっちゃにしながら両手を口に当てて叫んでいる。すでに今の状況からして幸せとは程遠いところにいる気がするんですけど…。
二人のそんな対応に私の期待は裏切られ、さすがの私も怒りがこみ上げてくる。

「幸せって…ちょっと！！私の幸せを考えるなら助けろーーーーっっ～～～～～～！！？」

最後の最後に思いっきり泣き叫んだ私の視界は両親から真っ白な光に塗り替えられた。

ゆらゆら

ゆらゆら

リビングだったはずの部屋は、真っ白な視界、真っ白な世界に埋め尽くされ、私はその中をぼんやりとした意識の中、漂う。
そんな真っ白な世界の中、ふと目の前に幼い子供が現れる。

（ーーーこの子は…小さい頃の私！？）

その子には私が見えていないようだった。そんな幼い私の周りには3人の大人がいた。

その内の二人は私のよく知っている人物だった。若いころの父と母。
二人とも元々若く見えるが、それ以上に若々しく、そして美しく、綺麗だった。
小さい頃の私はそんな二人と両手をつないで、目の前に佇んでいる

人を見ている。
顔はよく分からないが男の人で、身長は父よりも高く、ゆうに１８０センチは超えている。全身黒ずくめで、背中にはマントをつけている。
その男の人は幼い私の前にゆっくりとしゃがみこむと視線を合わせ微笑んだ。
「っ！！」
その光景を見ていた私は思わず息を呑む。あまりにも整った顔立ち。切れ長の目に吸い込まれそうなほど、どこまでも黒い瞳。鼻筋はスッと通っており、形のよい唇。滑らかそうな白い肌。今まで生きていてこんなに整った顔の人を見たことがなかった。
私の父も整った顔立ちの方だが、比べ物にならない。同級生の女の子たちは父をみて、自分の親と交換してほしいとか、すごくカッコいいとか言っていたが、きっとこの人を見ると、のしを付けて父を返し、この人に乗り換えるだろう。…それほどまでに完璧だった。
その男の人が幼い私を見つめ口を開く。
「ルア、私の可愛いルア。大きくなったら私のお嫁さんになってくれるね？」
そんな彼を見て幼い私は一瞬キョトンとするものの、すぐに満面の笑みになり、コクンと頷く。
「うん！るあ、ヴィスのお嫁さんになるー！」

彼はその返事に満足そうに頷き、スッと立ち上がった。そして…
私の方を向いた……ような気がした———。
その瞬間、またあの眩しい光が全体を包み込み、私はとっさにぎゅっと目を閉じた。

しばらくすると、閉じた瞼に感じていた光が無くなり、いままでふよふよと漂っていた感覚の体は何か固い物の上にあった。
恐る恐る目を開けて周りを見渡す。そこはいつもの慣れ親しんだ我が家の一室ではなく、高い天井に、広い空間。いくつもの大きな柱。その柱にはここからではよく分からないが、なにか細かい模様が彫りこまれている。大理石と思われる床は丹念に磨かれているのかピカピカで、そこには私の不安そうな顔が写りこむ。

「ルア、よく来たな。ずっと待っていたぞ」

突如、頭上からふってきた声に思わず顔を上げる。
すると、私の目の前には先ほど白い空間で見た綺麗すぎるほど整った顔立ちの男が静かに佇んでいた。

「あ、の…ここは……」

私はさっきまでリビングで両親と話していたはずだ。それなのに部屋が急に光りだしたと思ったら、気づけば見知らぬ部屋にいる。
色々な事が突然起こって、私の脳はもう許容範囲を超えている。なんだか目の奥が熱くなってくる。

私はしゃがみこんだ体勢のまま、自分の事を知っていると思われる目の前の綺麗な男の人に尋ねた。

目を潤ませた私の前に、男の人は床に膝をつき、そして――――

「可愛いーーーーーーっっっ！！！！」

ぎゅーっと力いっぱい抱きしめられた……。

「っっっ！！？」

一瞬頭の中が真っ白になる。しかし次の瞬間、人生今までで出したこともないような大きな悲鳴が、建物中を駆け抜けた。

「き…きゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」

その声を聞きつけ、扉の外でいたであろう人たちが一斉に部屋になだれ込む。

「いかがなされましたか、魔王様！！」

「ご無事ですか！？」

「な、なんだか、すごい悲鳴がき、きこえたんだなっ」

ぞろぞろと入ってくる人たちをみて私はさらに悲鳴をあげた。

「い…いやぁあああああああっっっ！！」

部屋に入ってきた人たちは、『人』ではなかった。
牛のような顔をした頭に筋肉隆々の体。豚のような顔にこれまた筋肉隆々の体。
そして2メートルはあるかと思われる巨大な身体に甲冑を纏い、…これにいたっては首がなかった。

…私は一体どうなるのだろうか。
いや、そもそも、これは現実なんかじゃない。きっと夢をみているんだ。
次、目を覚ませば私はきっと自分のベットの上で、朝ごはんを食べて両親に行ってきますって言って普通に学校に行くんだ。そうだ、そうに違いない。
そして私の意識はそこで完全にブラックアウトするのだったーーー。

＞i３１５７４―４００３＜

6．待ち望んだ少女（前書き）

※挿絵あり

6．待ち望んだ少女

「ルア？大丈夫か、ルア」

そう言って悲鳴を上げた少女を覗き込むと、私の腕の中で完全に意識を手放している様子だった。

「す、すみません、魔王様。俺達が驚かしてしまったようで…」

首無し騎士が頭があったであろう何も無い場所に手を当て、巨体を曲げて謝ってくる。

「その、悲鳴が聞こえたもんで、驚いてしまって」

「ま、まさか、ルア様が来てるなんて、し、知らなかったんだな…」

あせった様子でミノタウロスとオークが交互にしゃべる。

「いや、構わん。私が我慢できず急に呼び寄せてしまったからな。ルアも状況を把握できていないようだったし、次、目覚めた時にきちんと説明すれば大丈夫だ」

そう言って愛おしそうにルアの頬をなでる。気を失っているがくすぐったいようで軽く身をよじる。

その様子がまた可愛らしい。１６年待ち続けた少女がようやく自分の目の前にいる。

１６年というのは自分にとっては僅かな時間であるはずなのに、１００年も２００年ともとれるくらいに長いものだった。

それほどまで、自分はルアを待ち望んでいた。

自分の事をルアは忘れていたようだが、それもまあ、構わない。これから色々と知ればいいのだから……
そう、色々と……。
想像して自分の口角が上がるのがわかる。ついでに涎もたれそうになる。…おっと危ない。

「ど、どうしたんだな、魔王様」

「うむ、きっとルア様との再会を喜んでおられるのだろう」

オークの疑問に首無し騎士がさもあらんと答えた。
ミノタウロスはルアをじっと見つめ、感慨深そうだ。…あんまり見るな。ルアが減る。

「それにしても…あの小さかったルア様も大きくなられて…。あのころも愛らしかったですが、さらに可愛らしく愛らしい女性になられましたな」

「たしかに成長されたと思うが…まだ小さいのではないか？気をつけないと踏んでしまいそうだ」

と、首なし騎士が物騒なことを言う。
私の守護で護られているルアには、ちょっとやそっとのことでかすり傷などつかないが、それでも私のルアが踏まれるのは許し難い。
首なし騎士に釘を刺しておく。

「お前に踏まれたくらいでルアは傷の一つもつかないと思うが、ルアにかすってでもしてみろ、減給どころか、１００年タダ働きだ」

軽く首無し騎士を睨むとおびえた様子で「ひえぇぇ」といってルアから一歩遠のく。そのまま視界から消えてくれ。
たしかに子供の頃から成長したと言っても、今でも十分ルアは小さい。多分身長は１５０センチいくかいかないかくらいだろう。
腰まで伸びた長く美しい漆黒の髪。透き通った白い肌に、先ほどまで私を見つめていた、くりっとした大きい瞳。薄く開いた唇はほんのり桜色で思わず吸い寄せられそうになる。が、ここは我慢だ。意識のないルアに口づけするのはいいが、ここにはこいつらがいる。
あとあとルアに告げ口されれば私に対する心象が悪くなるだろう。
時間はたくさんあるとはいえ、空いた時間を埋めるには最初が肝心だ。

「私はルアを部屋に運ぶ。お前達は持ち場へもどれ。ああ、あとレノールを呼んでこい」

そう言って私はルアを抱え、立ち上がると前々から準備しておいたルアの部屋に運ぶ。
３人も姿勢をただして、敬礼すると私たちを静かに見送った。

――――そして魔王様は気づいていない。肝心な最初は、ルアにとって最悪の再会になってしまったことに……。
残された３人はその真実に薄々感づきながら、ルアが目を覚ました後のことを思い、大いに心配するのであった。

＞ｉ３１８３５―４００３＜

7．美女とヒールとハリセンと。（前書き）

※挿絵あり

7．美女とヒールとハリセンと。

「う…うぅん……」

手放した意識が徐々に戻ってくる。私はどうしたんだろう。
卒業式が終わって家に帰って…それで…それでっっっ！！！？

「ゆ、夢オチっっ！！！？？？」

「なんだ？夢オチとは」

ガバっと布団から起き上がると、冷静なツッコミが返ってきた。
その声は両親とは違う声で、でも聞いたことのある声だった。
おそるおそる声のした方へ振り向くとそこには、気を失う直前みた顔と同じ整った顔が椅子に座って長い脚を組んでいた。
本を読んでいたようで、かけていたメガネと本を椅子の横にある机に置く。その流れるような仕草に一瞬状況を忘れて見とれる。
絵になるなぁ。場違いにもそんな事を思ってしまう。
しかし自分の置かれた状況を思い出しハッとすると、かぶりを振って邪念を追い出す。

「どうした？」

そんな様子に彼は首をかしげ尋ねる。
は…恥ずかしい。絵になる人と、かたや自分は挙動不審でなおかつ寝起きだ。
そんなどうしようもない状況に恥ずかしさがこみ上げ逃げ出したくなった。

とりあえず手近にある掛けてあった布団をたぐりよせ恥ずかしさから顔を半分隠す。
目だけ出して、今の状況を尋ねてみる。

「あ、あのっ、気を失ってしまったみたいですみません。介抱していただいたみたいで…その、ありがとうございます。私、状況がまったくわからないんですが、よかったら教えていただけますか？」

緊張で声が震える。叫んだ上に気を失って介抱してもらって…これ以上迷惑はかけたくなかったが、そうもいっていられない。自分がなぜこんなところにいるか分からないが、きっと彼は知っているだろう。
父と母は私の結婚相手を『魔王様』と言った。そして気を失う直前、入ってきた人（？）たちも『魔王様』と言った。つまり彼が『約束した相手』なのだろう。それに、幼いころ見た記憶と一緒だ。
１６年も昔なのに、なぜか今も昔と何一つかわらない同じままの姿とその顔は…

私の問いに彼は一瞬固まるが、私がそれをみて首をかしげると、スッと立ち上がり、そして…

「ルゥゥゥアアアアア！！」

「いやあぁぁぁあああっ！！」

飛びかかってこられた。つい最近見た出来事で同じことがあった気がする。そんなことを一瞬頭の隅で思いつつ、その時と同じように右手を突き出していた。

「こんのっ！愚兄っっ！！」

スパーンと小気味のいい音が部屋に響きわたる。
彼は私の拳が届く手前で床につっぷしていた。頭には大きなタンコブができている。
私は殴らずにすんだ安堵感に息をつきつつ、咄嗟にでてしまった右手をみてあわてて布団のなかにしまった。
改めて目をやると、そこには見事な深紅の髪を靡かせ、胸元とスリットがざっくり開いた、髪色と同じ色のセクシーなドレスに身をつつんだ美女が立っていた。
…そして右手にはその容姿とは不釣り合いなハリセンを持っていた。

「すまないのぉ、兄が不敬を働いて」

彼女はそう言って私の方を向き申し訳なさそうにした。
厳密には働く前に叩き落とされたのだが。でも最初会った時も急に抱きしめられたな。と、思い出して顔が赤くなる。

「大丈夫か？顔が赤いようだが…もしや、他にもなにか……」

いいながらヒールの高い踵で床につっぷしている魔王様をぐりぐりと踏みつける。

「だ、だいじょうぶですっ。何もされていませんから！」

その様子を見て慌てて手と頭をふりながら否定する。
…仮に一番偉いと思われる人にそんなことをして大丈夫なのだろうか。

「ふむ、ぬしがそう言うのであれば…」

心なしか残念そうに言うと彼女は彼から踵を放した。彼の背中にはくっきりとヒールで踏まれた痕が残っている。痛そうだ…。

「あの、あなたは…？それとあなたも私の事を知っているんですか？」

おずおずと聞いてみる。彼にも尋ねたが聞きたい返事は今のところ返ってきていない。というか今まで会話がまともに成り立っていない。

あるとすればさっき起きた時にツッコまれたことくらいか…。そう尋ねると彼女はパアアアと顔を輝かせ満面の笑みで頷いた。

「おお、もちろんじゃっ！ぬしの事はよく知っておるぞっ。ぬしがこーんなに小さいころに妾と一緒に遊んだものじゃ」

そういって彼女は親指と人差し指で形をつくる。一寸法師じゃあるまいし、さすがにそんなに小さくなかったと思うけど…。

でも、そうやってニコニコと話す姿をみると、私までなんだか嬉しくなってクスっと笑ってしまった。

それにしても、彼女はどうやら私の小さい頃を知っているようだ。彼女なら今の状況を説明できるかもしれない。

「あ、あのっ、私、覚えてなくって…一緒に遊んでもらったみたいなのに、ごめんなさい。あと今の状況も正直よく分かってなくって…よかったら教えていただけますか？」

そういうと彼女は目をパチクリさせて私を見た。美女なのにそのア

ンバランスな表情が可愛い。そう思ってると彼女はワナワナと震えだし、まだ床につっぷしている彼をギっと睨む。その様子をみてまた踏むのかと私はとっさに布団で顔を隠した。
すると頭上から「はあぁぁぁぁ～」と、盛大なため息が聞こえた。恐る恐る布団から顔を出すと、困ったように微笑む彼女と目があった。

「すまぬな。ぬしを驚かせてしまったようじゃ」

それにしても…と彼女は続ける。

「わけもわからぬまま、見知らぬ世界につれてこられたというのに、ぬしは怒ることも、取り乱すこともせず、健気に状況を把握しようとしておる。立派に育ったのぉ」

そういって布団の端に腰かけると、慈しむような瞳で見つめ、左手で私の髪を梳く。その表情と仕草に女の人なのにドキドキしてしまう。

「い…いえ。そ、そんなことないです」

最後は蚊のなくような声になってしまった。怒りこそしてないものの、叫んで気絶はしてしまっている。しかしそんなことは言えず、かといってはっきり否定することもできず、うつむいてしまう。

「ふふ、ルアは愛いのぉ～。ぬしは状況が分かっていないといったが両親からは何も聞かなんだか？」

「えっと・・・。私が魔王様のお嫁さんになることを約束していて、大学も就職もできないという事は聞きました…。でも…」

「でも？」

言い淀むと先を促され、思い切って口をひらく。

「私はその、魔界とか魔王とかって信じてなくって…見たこともないし、私たちの世界ではおとぎ話の中の世界だったから…。だから親も何か勘違いしてるだろうって。そう思って直接話をしてお断りしようと…」

「「断るぅううう！？」」

言うや否や二人の叫びに私の声はかき消えてしまった。

＞i３１９３９―４００３＜

8．幼き日の約束

完全に伸びていると思っていた魔王様が私の告白（セリフ）を聞いてガバっと起き上がる。
彼女も一緒に声を合わせて驚いている様子だった。…なにか不味かったのだろうか。
それに驚いて私もビクっとする。
それをみた彼女はハっとすると、「また驚かせてしまったようじゃ、すまんの」と苦笑する。
魔王様は呆然自失といった感じだ。だんだんこの人のイメージが変わっていく。あまりにも綺麗な人だから感情を表に出すようなイメージがなかったのだ。とは言っても最初抱きつかれたり、先ほども飛びかかられたりしたことを考えれば、結構感情豊かなのかもしれない。
彼女はそんな兄の様子を一瞥し、私の方に向き直ると形のよい唇を開いた。

「取り乱してすまなんだの。…して、断る理由を聞いてもよいか？」

その問いに一瞬戸惑うが、もともときちんと話すつもりでいたのだ。
彼女をみてコクンと頷くと、自分の想いを話した。

「理由は色々あるんですが、一つは知らない人と結婚したくはなかったということ、あとこれが夢で無ければここが魔界と呼ばれるところだと思うのですが、私は人間なので元いた世界に帰りたいです。せっかく大学も受かったし…それに結婚はまだ早いというか…なのでお断りしようかと…」

「ふむ、その申し出は却下だな！」
いつの間にか復活した魔王様が私が言い終わるやいなや私の願いを即座に斬って捨てた。
「えっ！？なんでですか！！？？」
そこまで即答されるとは思っていなかった私は驚いて声を荒げる。
すると魔王様の目がスッと細くなる。気のせいか周りの温度も下がった気がした。
さっきまでとは違う彼の纏う雰囲気と表情に戸惑う。…とてもさっきまで妹に足蹴にされていた人とは思えない。
「なんで…だと？」
そう言って冷笑を浮かべ、私に近づく。口は笑っていても目が笑っていない。そのただならぬ気配に、怯え、彼女に視線で助けを求める。
しかし、先ほどは助けてくれた彼女は、そんな私の視線をかわし、兄の様子をじっとみている。
今の状況を助けてくれる人はいない、そう判断した私は、少しでも彼から逃れようと握りしめていた布団と一緒に、じりじりと後ずさる。
しかし、そんな抵抗もむなしく、あっさりつかまってしまう。彼はその雰囲気を纏わせたまま、手を伸ばし私の顎を持ちあげた。
私はその得も知れる雰囲気に圧倒され、口を開くことも、手を払う事もできず、ただ目を見開いて、彼のなされるがままになっていた。
そして彼の顔が近づいてくる…。キッ、キスされる！？あまりにも遠慮なしに近づいてくる顔に咄嗟にそんな事を考えてしまう。
なんの抵抗にもならないが、思わずギュッと目をつむる。

……

……

……あれ？

一向に何も起きる気配がない。ただ、まだ顎には彼の手の感触があった。状況を確認するため、おそるおそる片目をあける。

「きゃっ！」

彼の顔が、お互いの鼻が触れ合いそうなほど近くにあった。私はそんな彼をみて、息を呑む。彼の顔は先ほどの冷笑とはうって変わって、傷ついたような、そして困ったような表情になっていた。

「お前とはもう血の契約を結んでいる。私から離れることも、人間界に戻ることもできない」

「血…の契約…？」

聞いたこともない契約。そもそも私はそんな契約結んだ覚えがないのだが、もしかしたら、幼い頃の自分が結んで覚えてないだけなのだろうか。

ただ、さっきの彼の傷ついた顔をみたら「覚えてない、知らない」なんて言えなかった。なぜか彼の傷ついた姿はみたくなかった。

「そうだ、お前と幼い頃結んだ契り。それは決して破棄することのできない契約。お前は覚えてないようだがな」

そう言って彼は私の顎を解放し、目を逸らしてため息をつく。
やはり、私が覚えていないだけ…。そしてそれは破棄できない約束……。
頭の中で彼の言ったセリフがぐるぐる回る。しかし、次に発せられる彼の言葉はそんなこと頭から全部吹き飛ぶようなとんでもない事だった。

9．衝撃の真実

「それに、お前は先ほど断る理由に、自分は人間だから人間界に戻りたいと言っていたが、お前はもともと魔族だ。だから人間界に戻る必要などない」

……はいっ！？

なにか受け入れがたい、信じられないような言葉が聞こえた気がした…

私が魔族？！

「えっと…嘘ですよね？」

もしくは冗談ですよね？

「嘘でも冗談でもない」

私の心を読んだかの如く、心内までハッキリと否定された。

「で、でもっ、私の両親は人間ですしっ…」

自分が魔族だという可能性を否定する為、自分が人間であることを示す。

すると魔王様は片手を顔に当て天井を仰ぎ、重いため息をついた。

な・・なんだろう…嫌な予感がする…

額に嫌な汗がつたう。

「人間から魔族の子は生まれん。片親が人間ならばハーフもあり得るが、生憎とお前の両親は二人ともがれっきとした魔族だ」

えぇえええええ！！！！？？？

私は驚きのあまり硬直した。なんかもう、驚くことがありすぎてよく分からない。

その様子を見て、魔王様が「大丈夫か？」と声をかける。

その言葉にハッとし、何かの間違いだと頭を振り、思いつく疑問を叫ぶ。

「で、で、でで、でもっ！二人とも見た目、人間と同じですけどっ！？魔族の姿、形って人と違うんじゃないんですか？こう、角とか生えてて…」

と、両手で人さし指をたて、自分の頭につけてジェスチャーする。
その仕草をみて魔王様の表情が一瞬緩む。しかし、すぐ「ゴホン」と咳払いすると元の表情に戻り説明してくれた。

「まあ、魔族は色々な種族がいるからな。たしかに人型でそう言った角の生えている奴もいるし、お前が先ほど見て倒れた姿のやつもいる」

そういえば失神する前に見たことのない容姿をしたバケモノ…っていったらいけないのかもしれないけど、見た気がする…。
思い出してサッと顔が青ざめる。

「お前が育った世界ではああ言った容姿はなかなか見ないだろうが、まあ、そのうち慣れる。悪い奴らじゃないから大丈夫だ」

なかなかというか、まったくいない。慣れる…と言われても、そうですか、と頷けない。
彼はそのまま話を続ける。

「…して、先ほどの話の続きだが、見た目なら私も、そこにいるレノールも人間の容姿と似ている。だいたい、魔力の強い魔族は人間と同じような姿だ」

そう言われて、レノールと呼ばれた魔王様の妹を見る。彼女は妖艶に微笑むと力強く頷いた。

「そういうことじゃ。ずっとヒト世界で生きてきたぬしには分からぬかもしれぬが、ぬしも強い魔力を持っておるぞ」

妾には及ばぬがな、そう付け加えてレノールさんがウィンクする。

強い魔力…
そう言われてもよく分からない。でも結局二人が言ってることは、両親も魔族で、私も魔族ってことで…

「私には、よく…わかりません…」

そう言うだけで精いっぱいだった。

「――――っ」

魔王様がまだ何かを言おうとするとレノールさんが手で制し、代わりに口を開く。

「今日は色々とあって疲れたであろう。今宵はゆっくりと休むがよい。明日、ヌシの両親も呼んであるゆえ、聞きたい事は両親の口から聞くがよかろう」

『両親がくる』

その言葉は安心と絶望、両方を私にもたらした。

――魔界にくる

それは両親が人間ではない事を嫌でも受け入れなければならなかっ

た。
私が何も言えず伏すと魔王様が私の前に佇み、手のひらを私の瞼の上にのせるとゆっくりと囁いた。

「レノールの言うとおりだ。今日はゆっくり休め」

その言葉を聞くと強張っていた身体の力が抜け、ベッドに体が沈み込む。そして、ぐちゃぐちゃな思考でとても眠れそうに無かった頭もスッと軽くなり、急に眠気が襲ってくる。
彼が手を放すと私の意識も遠のいていく。
今日は色々あった。信じれないこと、受け入れがたいこと。この眠気に身を委ねて何も考えずにいたい。でも…
薄れゆく意識の中、彼に手を伸ばす。彼の傷ついた顔がなぜか放っておけなかった。

「忘れてしまってごめんなさい、ヴィス…」

彼の名前が自然と口につき、私はそのまま真っ暗な世界へ身を委ねた。

10．新しい生活ー1ー

「ほんとに何も覚えておらなんだの」

レノールが、眠りについたルアをみつめ、寂しそうに呟いた。

「ああ、でも、もういい。そんなこと気にならない」

私はルアを見つめ微笑みながらそう言った。

「ほんっと現金なヤツじゃのぉ。名前を呼ばれたくらいでコロっと絆されおって。さきほどまでルアの事を『お前』などと呼んで冷たくしておったくせに…」

そう言って呆れながら、半目で私を見る。

確かに、ルアの『断る』という科白を聞いて一瞬我を忘れた。初め、久しぶりに会えた時は覚えて無くても構わないと思ったが、実際その態度と科白を聞いたら頭が真っ白になった。

自分でもそこまでショックを受けるとは思っていなかった。『血の契約』を結んだ頃、ルアは2、3歳と幼かったし、覚えてないのも無理はないと思っていたからだ。ほんとは『お前』なんて冷たい言葉でルアを呼びたくはなかった。ルアに嫌われるような真似は少しでもしたくなかった。

だから、きっとそのままでは眠れないであろうルアに睡眠を促す魔法を施したあと、眠い意識の中、私の名を呼んでくれた時は歓喜で身が震えた。自分の名前を呼ばれたくらいでこれほどまで嬉しいことはなかった。

「煩い。あとルアの前でやたら兄を足蹴にするな。私の威厳が損なわれる」

「ハッ、キサマの威厳など在りはせぬっ！我を忘れて妾のルアに飛びついてからに…。あのルアの怯えた表情…むしろ防いだことによってルアに嫌われずすんだことを妾に感謝するがよいわっ！！」

ふんっ、と腰に手を踏ん反り返る。くっ、我が妹ながら生意気な口をききおって…。しかし、早まった真似をしてルアに嫌われずにすんだのは幸いだ。最初抱きしめた時も悲鳴を上げていたし、慣れるまではあまり抱きしめたりとかそういった類は控えたほうがよさそうだ。…残念なことこのうえない。

「誰がお前に礼など言うか。それにしても、まったくルアの両親は…」

「なーんにも話してはいない様子じゃったのぉ～。まあ、あの二人…じゃから、なんとなく予想はついておったが…」

あの二人…ルアの両親はむかしっから、どこかズレていてマイペースを崩さない似たもの夫婦だった。

「はあ…完全に失念していた…私の落ち度だ。まあ、一番の被害者は…ルアだな」

「…じゃのぉ」

そう言ってちらりとルアを見やると、二人でため息をつき、部屋を後にした。

明日から私とルアの生活が始まる――――。

「……んっ」

眩しい…。瞼の裏に光を感じ、眩しさから身を捩り、布団をかぶる。

「もう、流亜ってば。いつまで寝ているの？もうとっくに朝ごはんの時間よ」

「うぅ～ん、あと5分…」

「だ～め、そう言っていつも起きないんだからっ！さっ、さっさと起きて魔王様に挨拶にいくわよっ」

……うん？

魔王様？

挨拶？

「まったく、魔界生活1日目でお寝坊さんだなんてっ！未来の旦那様を待たせるんじゃないの」

魔界？

未来の旦那様！？

そしてこの声は……

「お母さん！！？？」

「ようやく起きたわね。おはよう流亜、今日も良い天気よ」

がばっと布団から起きあがり窓の方を見ると、母がいつもと変わらぬ笑顔でカーテンを開けている所だった。

ただ、いつもと決定的に違うことがあった。それは…

「お、お、お母さん！？な、なんでそんなドレスみたいなの着てるの！？あとなんでここにいるの！！？」

「まぁまぁ、流亜ったら朝からそんなに大きな声をだして…血圧あがっちゃうわよ。あと『ドレスみたい』じゃなくてこれは立派なドレスよ。どう？素敵でしょ」

そう言ってクルンと回る。たしかに薄いパープルの色合いのドレスは母によく似合っていった。だが、しかし、質問には答えてもらっていない。

「確かに素敵だけど…そうじゃなくって！な・ん・でここにいるの！？」

「もう、流亜ってば怒りっぽいんだから…ここにいるのは魔王様に呼ばれたからよぉ～」

「魔王様に…？」

そう言えば今日私の両親が来るってレノールさんが言ってたっけ…って……

「そうだ！ねえ、お母さんとお父さんも魔族って本当なの？あと私も…」

「ええ、そうよ。もちろん流亜も魔族よ。当たり前じゃない～」

あっさりと何事もないように肯定された。しかも当たり前とまで言われた。

私は脱力して布団に突っ伏す。

「あらあら、どうしたの？」

「私、知らなかった。ずっと人間だと思ってた」

布団に顔を埋めたまま呟く。

「あらら、そうだったの～。でも魔族でも人間でもあまり変わらないわよ～。まぁ、ちょっと魔法が使えてー、ちょっと人よりも長生きできるけど」

問題ナシっと母は言う。魔法が使えるってだけでも人間とかなりかけ離れてる気がする…。

「はぁ～、そんな事だからルアが戸惑うことになるんだ」

突然聞こえた声にパッと顔をあげて声のした方へ向くと、開け放た

れたドアにもたれかかる魔王様の姿があった。その後ろに申し訳なさそうに佇む父の姿があった。

「魔王様…と、お父さん！？」

「おはようルア。それと魔王様じゃない、昨日のようにヴィスと呼べ」

「おはよう流亜～。いい朝だね～」

そういいながら父は魔王様の後ろに隠れている。私に怒られる事を勘付いているようだ。それにしても…

「あ、の…、名前は昨日勝手に口からでちゃって…慣れないので魔王様でも…」

「ヴィスだ」

「はい、ヴィス」

有無を言わせぬ威圧感に思わず返事をしてしまった。その答えに魔王様…もといヴィスはうんうん、と満足そうに頷く。

そして私は昨夜からの苛立ちとストレスを父にぶつけるべく、笑顔で父を呼ぶ。

「それはそうと、お・と・う・さ～ん？」

「ひぃいいいっ！流亜、め、目が笑ってないぞっ」

「当たり前よっ！まともに説明もないまま、ここに飛ばされて…挙句、私が人間じゃなかったなんて！！！急にそんなこと言われる私の身にもなってみてよっ」

「い、いや、その、悪かった！スマンっ流亜！」

「ごめんなさいね、流亜。あなたがそんなに怒るだなんて思わなくて…パパもママも悪気があったわけじゃないのよ」

分かっている。悪気が無い事くらい。ただそれを聞いて、そうですか。と赦せるほど私もまだ大人じゃない。

「どうして、全部、ちゃんと説明してくれなかったの？」

「どうしてって…なぁ？」

「どうしてといわれても…ねぇ？」

「「ちゃんと説明した気でいたから？？」」

ずこーーーーっ

二人でハモって二人で疑問符…。

ほんっとうにうちの親は…

「ほんと相変わらずのマイペースだな。二人とも。これではルアも苦労するはずだ」

ヴィスもそんな二人をみて私に同情する。よかった、分かってくれ

る人がここにもいた。なんだかそれだけで救われた気がするのだった……。

11．新しい生活－2－

「さて、今後のことだが……」

きゅるるるるるぅぅぅ

ヴィスが改めて口を開くと同時に私のお腹の虫が盛大になった。
みんなの視線が私に集中する。うぅ…そういえば昨日の夜から何も食べてなかった…。恥ずかしすぎる…。私は居た堪れなくなって真っ赤な顔を布団で隠した。
その様子をみてみんながクスクスと笑う。

「そういえば、ルアは昨夜食事をしていなかったな。気づかなくてすまない。起きぬけでもあるし、ここに食事を運ばせよう。お前達も一緒に食べていくか？」

「お心遣い痛み入ります。ですが、我らは門番の仕事がありますが故、あまりあちらを空けておくことはできません。またの機会にお願いします」

「ありがとうございます、魔王様。またゆっくり食事を致しましょう。流亜をよろしくお願いしますね」

そう言ってやんわりとヴィスの申し出を断る父と母の姿はいつもと違う人のようだ。そして父の言葉に引っ掛かる。

「門番？」

私が尋ねると父の肩が跳ね上がる。

「あ、ああ。そうか流亜は知らなかった…かな？」

「知らない」

即座に言うと父はアハハハと乾いた笑いをしてごまかし、そして…逃げた。

「それでは魔王様！我らは仕事に戻ります！流亜のこと…あ、あと説明もお願いします～」

「それでは魔王様、ごきげんよう。流亜も新しい生活がんばるのよ～」

そう言うと、二人の足元に私が飛ばされた時と同じような魔方陣が浮かびあがるとそのまま吸い込まれるように消えてしまった。突然いなくなってしまった両親に多少驚きはするものの、昨日から信じられないことの連続で、もう驚く感覚が麻痺してしまっている。

「な…なんなのよ…もうっ」

結局、両親からまともな答えは何一つ返ってきていない。むしろ常に気になるワードだけ残していってる気がする…。

「さて、ルアも気になる事があるとは思うが、先に食事にしよう。隣の部屋に運ばせた。メイドを呼んであるから身支度がすんだら来るがいい」

そういってヴィスと入れ替わりに数人のメイドさんがやってきて、あれよあれよという間に着替えさせられ、身支度が終了した。

服は胸元に大きなリボンのある桃色のワンピースでひざ丈まである。後ろは紐で編み上げられており、足元はドレスと同じ色のシンプルなパンプスを履いた。そのシンプルな装いに母が着ていたようなドレスじゃなくて内心ホッとする。そして食事をするべく隣室へ向かう。

私がいる部屋は寝室で、隣にリビングと思われる部屋があるようだ。朝、ヴィスと父が入ってきたドアを開けると、朝ごはんのいい香りが漂う。

きゅるるるるる

その匂いを嗅いで私の空腹が刺激され、またしてもお腹がなってしまった。

「はう……」

恥ずかしい、穴があったら入りたい。

ヴィスがこちらをみて微笑む。

「準備が整ったようだな。うむ、その服よく似合っているぞ。さあ、食事にしよう」

「あ、ありがとうございます。わあぁ、美味しそう…」

さらりと言われた世辞に頬を赤く染めながらも、空腹から意識はすぐに料理に向いた。サンドイッチやスープ、サラダ。メニューとしてはよくある朝ごはんだか、飾り切りされた野菜や、色とりどりな料理は見目を楽しませた。

「遠慮なく食べるがいい」

「はいっ、いただきます！！」

私は満面の笑みで手を合わせると目の前の御馳走に手を伸ばした。

「おいしいぃぃぃ〜〜」

空腹は料理の最大のスパイスとも言うが、今まで食べてきた料理で一番おいしいと感じた。トマトも瑞々しく、甘みが口いっぱいに広がる。まるでフルーツのようだ。

「そうか、そうか。ルアに喜んでもらえて私も嬉しいぞ」

笑顔でヴィスがうんうん頷く。ヴィスは楽しそうに私が食べている姿を見つめているが自分はまだ食事に手をつけていない。

「えっと、魔…じゃなかった、ヴィスは食べないんですか？」

「ああ、私はもう食べてしまったからな。それは全部ルアの分だ。あと敬語はいらない。先ほど両親に話していたように話せ」

なんと、この量全部私のだったのか。とても一人前とは思えない。小さめのテーブルとはいえ、所狭しと展開されている料理はゆうに2人前は超えていた。

それにしても…

「さ、、、さすがに両親と話すようには…ヴィスは魔王様で一番偉い人なんですよね？」

とてもじゃないけど恐れ多いです！そう思ってサンドイッチを片手

に汗をかく。

「ああ、そうだ。だから私が敬語はいいといっているのだからそうしろ」

有無を言わせぬ返答。悲しいかな、日本人の習性で思わず「はい」と言ってしまう。厳密にいえば私は日本人じゃ、もとい人間ではなかったわけだけど。

でもその物言いは決して反発したくなるような押さえつける物ではなかった。もしかして緊張を解してくれようとしてるのかな？そう思いつつ片手に持っていたサンドイッチを口に頬張った。

ヴィスはそんな私の様子を頬杖しながら微笑ましそうに見ている。

なんだか居た堪れない。その状況を少しでも早く脱しようと、私は目の前の料理に没頭した。

12．新しい生活ー3ー

「昨夜は…色々とすまなかったな」

食事もひと段落し、食後の紅茶を飲んでいると、ふいにヴィスが口を開いた。

「昨夜…？」

「ああ、たくさんルアを怯えさせてしまった」

「い…え、あっ、ううん。私の方こそ急に叫んだり、気を失ったり…」

そこで、またあのヴィスが傷ついた顔が頭をよぎる。

「覚えてないからって、貴方を傷つけるような事を言ってごめんなさい」

「気にするな。覚えていないのも、ルアが幼い頃交した約束だしな。無理もない」

そういって笑う彼は昨日の暗い影が差した面影はどこにもなくて…気を使ってるようではなかった。

「それに覚えてないのなら…」

スッと右手を出し、私の顎を持ちあげ、親指でつぅっと唇をなぞる。

「これから私のことを色々覚えてもらえばいい」

そういって微笑む彼はとても妖艶で…

その漆黒の瞳にどこまでも呑まれそうで…

私は思わず、その妖しさに恥ずかしさも忘れ魅入る。

「……ぁ」

唇から吐息がもれ、それが合図だというように彼の顔が近づいてきて……

スパーーーーン

……ん？スパーン？

気がつけば目前まで近づいて来ていた彼の顔はなかった。

「なーにを、朝っぱらからやっとるんじゃ。ぬしらは！！」

「れ…レノールさんっ！！？」

「まったく、いつの間にそんなに仲良くなったのじゃ？ルアが心細くないよう、妾が出向いてきたというのに…これではお邪魔虫ではないかっ！！」

ハリセン片手に腕を組み、ぷんぷんと怒っている。よく見ると、またしてもヴィスがハイヒールの餌食となっている。

「ご、誤解ですっ！これはまったくなんでもありません！！！レノールさんが会いに来てくれて、すごく嬉しいです！」

両手と首を同時にぶんぶん振る。

（レノールさんが来てくれて助かった。あのままレノールさんがこなかったら…。…来なかったらなんだっていうのっ！なんにもない、何にも。見惚れてたんじゃない、突然のことに固まってしまっただけ！）

と、心の中で必死に言い訳じみた事を言う。

「むぅ、そうは見えなんだ…」
「そうです。まちがいありません！」
レノールさんにずいっと言いよる。
ここは間違えてもらっては困る。
私に詰め寄られたレノールさんは若干後ろに反りつつ、私の真剣な表情に驚いて額から汗を流している。

「そ、そうか。ぬしがそういうのならば…。…それはそうと」
納得してもらえたようだ。よかった。私は平静を取り戻そうと、席について飲みかけの紅茶に口をつけた。

「それはそうと、いい加減、私の背中から足をどけろ。いつまで踏んでいるつもりだ」
「おお、すっかり忘れておったわ。…と、そうじゃそうじゃ兄上、今日の政務はどうしたのじゃ？ここに来る途中、カルオスが探しておったぞ。妾が言うまでもないが…今隙を作るのは得策ではないのではないか」
「兄兼魔王を足蹴にして忘れるとはいい度胸だ…政務は今から行く。その件はお前に言われずとも分かっている。ルア、夜には戻るから一緒に夕食を摂ろう」

ルアをたのんだぞ、と一言残してヴィスは部屋から消えた。
なんか…両親といい、魔王様といい、みんな忙しいんだな…。まだ宙ぶらりんな状態の自分は不安定で知っている人が少ないのは少し不安になる。

「レノールさんはお仕事は大丈夫なんですか？」

「ん？妾か？妾は兄上にぜーんぶまかせておるからのぉ。妾は口より先に手が出てしまう故、兄上から政務は止められておるのじゃ」

「だから、基本暇人じゃ」そういって手を口にあてコロコロ笑っている。なんか…確信犯的な感じがしなくもない。

「それはそうと、先ほども言おうとしたのじゃが、その『れのーるさん』というのは止めてくれ。背中がむず痒くなる」

「えっと、じゃあ…レノール？」

「そうじゃそうじゃ。あと、敬語もいらぬぞ。両親に話すように話してくれてかまわん」

なんかどこかで同じことを聞いたきがする…似たもの兄妹だなぁ。思わず笑みが零れる。
ここは素直に『うん』と言っておく。そこで先ほど、両親とヴィスの会話を思い出す。

「両親と言えば、さっき会ったんだけど、門番の仕事に行くって言って帰っちゃった。私、門番っていうのも初めて聞いて…どんな仕事なの？」

ずっと疑問だったことを聞く。

「なんと、両親は仕事の事も話しておらなんだか…」

「うーん、前に聞いた時は、父は自分をしがないサラリーマンだって。母は秘書してるって聞いたの」

「ふむ、門番というのは、その名の通り、魔界と人間界を繋ぐ門を守る番人のことを言う。妾たちのいる魔界と、ルアの住んでおった人間界は基本、干渉しないよう定められておる。しかし、それを破ろうとしたり、事故で偶然渡ってしまう者がいるため、そう言った者たちを通らないようにするのが門番の仕事じゃ」

「魔界と人間界を繋ぐ…」

「門と言っても見えるものではない。時空の歪を感じ取り、それを防ぐのじゃ。ちなみに、魔界にも門番はおる。人間界で魔界からの歪を感じ、魔界で人間界の歪を感じる。そして侵入者を防いでおるのじゃ」

「危なくないの？」

「もちろん、危険もある。無理矢理侵入しようとする輩もおるから

の。しかし、門番につくのは魔王の右腕、とも云われる実力者たちじゃ。ちょっとやそっとのやつじゃ返り討ちにあうのが関の山じゃな」

「ってことは、うちの父と母も相当強いってこと？」

「うむ、なかなか想像つかぬかもしれぬがな。そのうち機会があれば闘う様をみれるやもしれぬぞ」

そんな危ない機会ないほうがいい…

「…それにしても、しがないサラリーマンと秘書って全然違うじゃない…」

「うん？まぁ、門番と言えども、魔界の仕事であるし、交代制で勤務時間も決まっておる。給料もでるし、そういう意味ではサラリーマンと変わらぬのではないか？ぬしの母も父のサポート役をやっておるから秘書のようなものか」

「あながち間違いじゃないってことね…」

「そういうことじゃの」

まさか、そんな危険な仕事をしてるなんて知らなかった。今度、父母に会った時にもう少し詳しく話を聞いてみよう。…ちゃんと答えてくれればだけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8223w/

魔王のお嫁サマ！？

2011年10月10日09時50分発行